

# 石神遺跡出土鋸の考察

長谷川 透

## I. はじめに

2006年、石神遺跡の第18次調査において、7世紀代の鋸が出土した。この鋸は木質の柄が残るなど古代の出土鋸では大変遺存状態の良い資料であった。このような大工道具は鉄身と木柄で構成されるため、木柄については埋没すると腐朽してしまう。よって、良好な遺存状態を保っている出土資料は数限られていた。従来、鋸に関しては、一部の伝世資料や出土資料を基に研究されてきた。しかし、石神遺跡出土鋸は、鋸の出土事例において極めて稀な遺存状態であり、古代の鋸を研究する上で重要な資料といえるのである。

『日本書紀』崇峻3（590）年、飛鳥寺造営の一こまとして、建材を山に取りに行く記事がある。飛鳥寺は百濟から派遣された寺工・路盤博士・瓦博士・画工が中心となり、渡来の先端技術を用いて造営されたことが知られている。しかし、今現在、飛鳥地域には飛鳥時代の息吹を残す建造物は残されていないため、寺院造営のためにいかに木を伐採し、製材し組み立てたか、その具体的な方法までは窺い知ることができない。一方、古代の建造物を追い求めてたどり着くのは、斑鳩の法隆寺である。法隆寺では、昭和の法隆寺解体修理に伴って、骨組みである部材を調査し、その木材に残る加工痕を分析がなされている（竹島1961）。また、法隆寺には献納宝物として伝世品する最古の鋸がある。この鋸は木柄が完存し、鋸身は錆も少なく、旧状を現在にまでよく残している。この鋸は奈良時代所産と考えられているが、法隆寺創建まで遡る可能性も残している。先述した法隆寺の部材には鋸挽痕が残っており、古代において寺院建設に伴う実物資料とその加工痕跡があわさって残る稀な事例といえる。法隆寺の伝世鋸は、古代の建築技術を考えるうえで重要なのである。

このように、古代の鋸において、石神遺跡出土鋸と法隆寺伝世鋸のみが木質の柄を残す資料なのである。以前、この2例について、柄に着目して比較・検討を行ったことがある（長谷川2007）。よって、本稿ではさらに、対象に鋸身を追加し、7世紀から10世紀に出土した古代の鋸との比較・検討を通して、石神遺跡出土鋸について若干の考察を行いたい。古代の鋸を検討することは、大工道具史における古代鋸の位置付け、ならびに古代の建築技術や製材技術の実態を解明する手がかりとなるだろう。

## II. 古代鋸研究史

鋸を研究するうえで対象となるのは、出土資料のほかに、伝世資料や絵画資料がある。

出土資料は、考古学の立場から三木文雄・古瀬清秀・伊藤実による論考があげられる。三木氏は古墳から出土する鋸を集成し、柄の分類と鋸身の性能差から編年案を示し、それが古墳の年代観と相応することを提示した（三木1954・1957）。古瀬氏は古墳出土の鋸を中心に鉄身に残る木質痕跡から両端柄式と片柄式とに分類し、前者から後者への編年案を示している（古瀬1991）。伊藤氏は古墳時代から古代までの鋸を集成し、柄の分類を通して、古代から中世にわたる鋸の変遷を概観している（伊藤1993）。従来の考古学的検討は、鋸身とそれに残存する木質から柄の形態を復元することに主眼が置かれてきた。考古学的検討を通史的に整理すると、

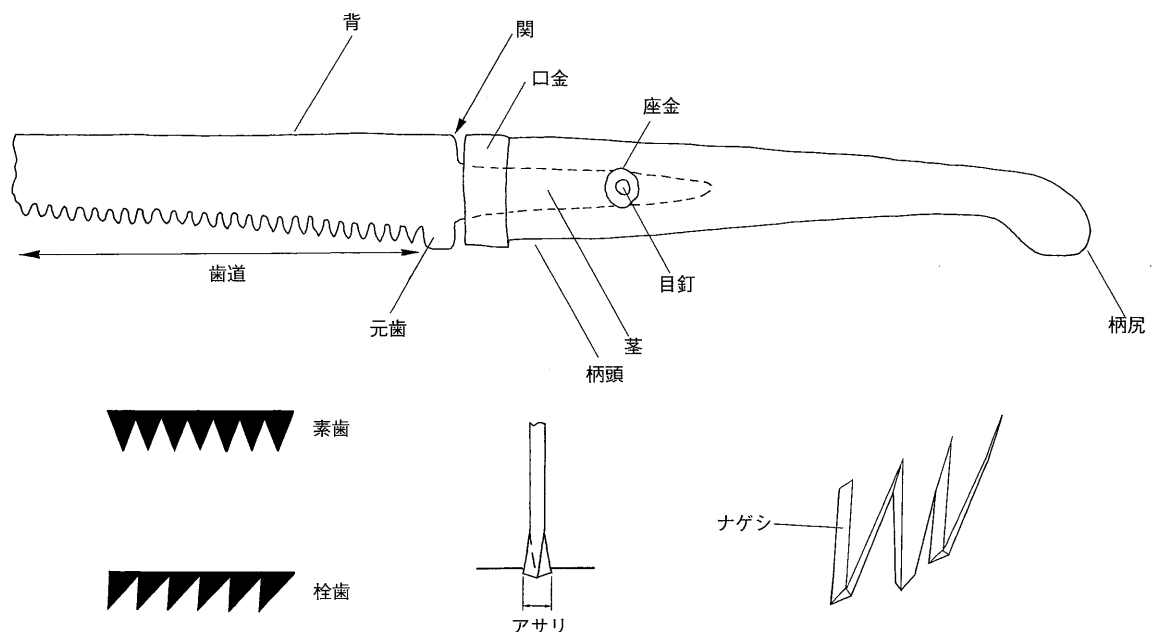
鉄製の鋸は4世紀代には出現する。出現当初の鋸身は短冊形をなしており、柄の装着法はよくわかっていない<sup>1)</sup>。6・7世紀代には鋸身に茎が出現し、片柄に統一されたが、アサリやナゲシ（第1図参照）が出現し始める。そして8世紀以降は大型化し、大半にアサリとナゲシが施され、現代にも通じる形を整えていったとされる（伊藤1993）。

上記のような考古学的手法以外にも、技術史の立場から吉川金次や平澤一雄、渡邊晶による精力的な研究がある。吉川氏は出土した鋸を製作・復元し、挽き込み実験をするなど、日本の鋸を全史的に網羅している（吉川1973）。近年では、渡邊氏が鋸を含むあらゆる大工道具を集成・研究し、道具発達史と建築技術との関連に言及している。渡邊氏は、古代の鋸には目釘の有無それぞれあり、口金は8世紀以降によく認められると指摘している（渡邊1999）。

次に伝世品と絵画資料による研究についてもふりかえてみたい。

伝世品では法隆寺伝世鋸と正倉院白牙把水角鞘小三合刀子などがある。法隆寺伝世鋸は、明治時代に法隆寺から皇室へ献納され、現在は東京国立博物館に収蔵されている。博物館収蔵以降、鋸身の特異な形状から多くの謎を呼び、多くの先学により研究がなされているが、今も見解の一致をみていない<sup>2)</sup>。ただ、現代の鋸と比べて非常に能率の悪い鋸である点は皆一致している。鋸の特異な形状と伝世品という性格上、儀器として非実用性のものであり、古制にのっとった儀式に使用されることもあり、復古的な形態をとることが多いという指摘もある（村松1973）。儀器なのか実用なのか、不可解な点が多い鋸である。一方、正倉院に所蔵される白牙把水角鞘小三合刀子は、刀子鋸と呼ばれるもので、刀子に細かい歯を刻む小さい鋸である。横櫛の歯や香木を挽くなどの細かい細工に使用されたものであった。伐採工具と言うよりは文房具に近い存在といえるだろう。

絵画資料からのアプローチによると、鋸は13世紀中頃から縁起絵巻類に現われ始める。出現当初はいわゆる木の葉型鋸が描かれるが、17世紀ごろ鋸の用途別細分化が進み、木の葉型以外の多様な鋸が登場する（赤沼・福井1997）。絵画資料の検討をもとに、遺跡出土品や伝世品などの実物資料との比較によって、中近世の鋸は鋸形態やその使用法、作業姿勢を検討することが可能となった。しかし、中世以前は史料が少なく考古資料に頼らざるを得ないのが現状である。



第1図 部位の名称

### Ⅲ. 石神遺跡出土鋸の概要

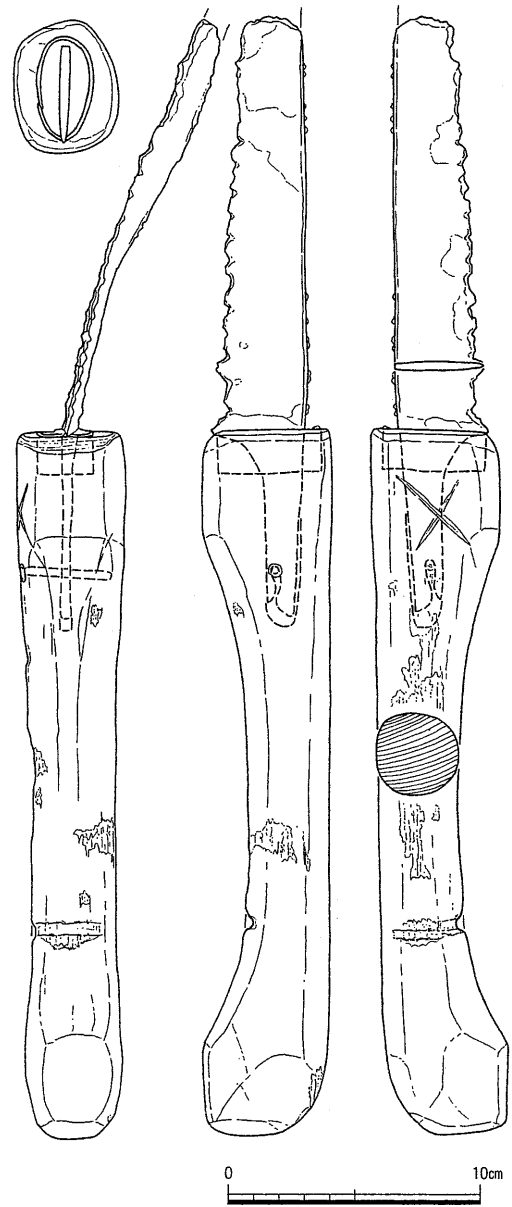
石神遺跡は斉明朝（7世紀中頃）の迎賓館として考えられている。7世紀前半には開発がはじまり、斉明朝には建物群のなかに石人像や須弥山石などの噴水石造物がつくられ、天武持統朝には飛鳥浄御原宮や藤原宮の官衙区画が形成される。発掘調査は奈良文化財研究所により、昭和56（1981）年から継続的に調査が行われ、13・14次調査では北限塀（奈文研2001・2002）、20次調査では東限と考えられる柱穴列（奈文研2008）が確認された。鋸は、先にも述べたように第18次調査にて出土した。出土地は建物の北限塀から約70mのはなれた地点で、北流する南北大溝SD4090の溝埋土から出土した。溝の時期はB期（7世紀後半）である天武持統朝にあたり、他にも土師器・須恵器・木製品・木簡・木屑・燃えさしが出土している（奈文研2007）。

鋸は木質の柄まで完全な形を残していた。鋸身の一端に茎につくって、柄を装着する片柄式。鋸身は片刃で、茎を柄に挿入し、それを目釘で固定する。鋸身の先端は欠損しているが、全長44.5cm、鋸身長25.2cm、鋸身幅2.7～3.8cm、鋸身厚3.5～4.0mm、柄頭幅4.47cm、柄長27.7cm、柄高5.37cm、柄最小幅3.38cm。破損前の刃長は不明であるが、本来は現状より長いものであったと推測される。鋸身は反りながらねじれており、土圧によるものと考えられる。鋸歯は残りが悪く、歯のほとんど破損しているが、歯の形状は三角形もしくは二等辺三角形であったと考えられる。現存で歯は15本確認でき、歯の深さ4mm。アサリやナゲシ（第1図参照）についても不明瞭である。歯道は直線的であるが、先端を欠失するため、内彎する可能性もある。棟関はつくらず、茎は棟側へ寄せる。

柄は蕨手状の柄尻に向けて細くつくりだす。柄頭の断面は隅丸の不整形、把手部分は円形である。柄尻の下面には平坦面をつくり、置くときに安定を図る。柄の上位には「×」の刻印がある。柄頭と歯の接する部分には、擦れたような痕跡があり、挽き材が当たっていたと推測される。柄の最も内彎する部分には幅5mm、長さ2cmと2.6cmを計る帯状の刳込みが互い違いに2条あるが、用途は不明。柄の樹種はヒノキである。

また、柄の中には幅1.5cmの口金をはめこんでいる。口金は鉄製で、径2.5×4.2cmの倒卵形である。一枚の鉄板からつくり、両端部を重ねて鍛接している。柄と鋸身の取り付け部からみて口金嵌め込み後に鋸身を挿入していることがわかる。

目釘は茎先に長さ約3.8cm、径3.5cmの鉄棒を打ち込んでいる。また、柄の内部は茎の周囲に茎挿入のための刳り抜きの輪郭がみえることから、茎を落とし込むために大きめに刳り抜いたことがわかる。



第2図 石神遺跡出土鋸（1：3）

#### IV. 古代出土鋸の特徴

これまで古代鋸は11例確認されている（伊藤1993）。本稿で対象とするのは鎌田遺跡・白倉下原遺跡・冷水村東遺跡・荒砥上川久保遺跡・武蔵国府関連遺跡・西山23号横穴墓・待戸遺跡・白幡前遺跡・神宿5号横穴・東大竹遺跡・石神遺跡例を加えた17例である（表1参照<sup>3)</sup>）。全国で出土した7世紀後半から10世紀の鋸を対象とした。

今回集成した古代出土鋸の事例を概観してみたい。主として7世紀の鋸は古墳や横穴などの古墳から出土することが多い。出土状況から初葬もしくは追葬に伴うのか不明だが、副葬品と考えられる。8世紀以降は住居内から出土する傾向が認められる。鴨入道1号横穴や栗原遺跡例のように、鋸は鑿と共伴することから、セットとして使用する機能も指摘されている（内田・柚原・榊原1992）。1遺跡1本出土する状況は、一括して出土するような状況とは異なり、なんらかの祭祀行為を読み取ることもできない。集落内で実用として使われたと考えられる。分布は東日本に多く、西日本では島根県に多いといえる<sup>4)</sup>。

次に鋸身の各部位の特徴について比較検討する。以下、古代鋸の特徴として（a）形状・（b）鋸歯・（c）目釘・（d）口金の4つに属性を設定して、検討を加えていきたい。

##### （a）鋸身の形状

歯道は内湾するものと直線状のものに分けられる。前者では大きく内湾する鴨入道1号横穴（4）・栗原遺跡（5）・冷水村東遺跡（9）と、わずかに内湾する西山23号横穴墓（1）・長勝寺脇館跡（3）・白倉下原遺跡（6）・武蔵国府関連遺跡（8）がある。直線状のものは東大竹遺跡（2）・白幡前遺跡（11）・郷の坪第1号墳（14）・神宿5号横穴（15）が挙げられる。

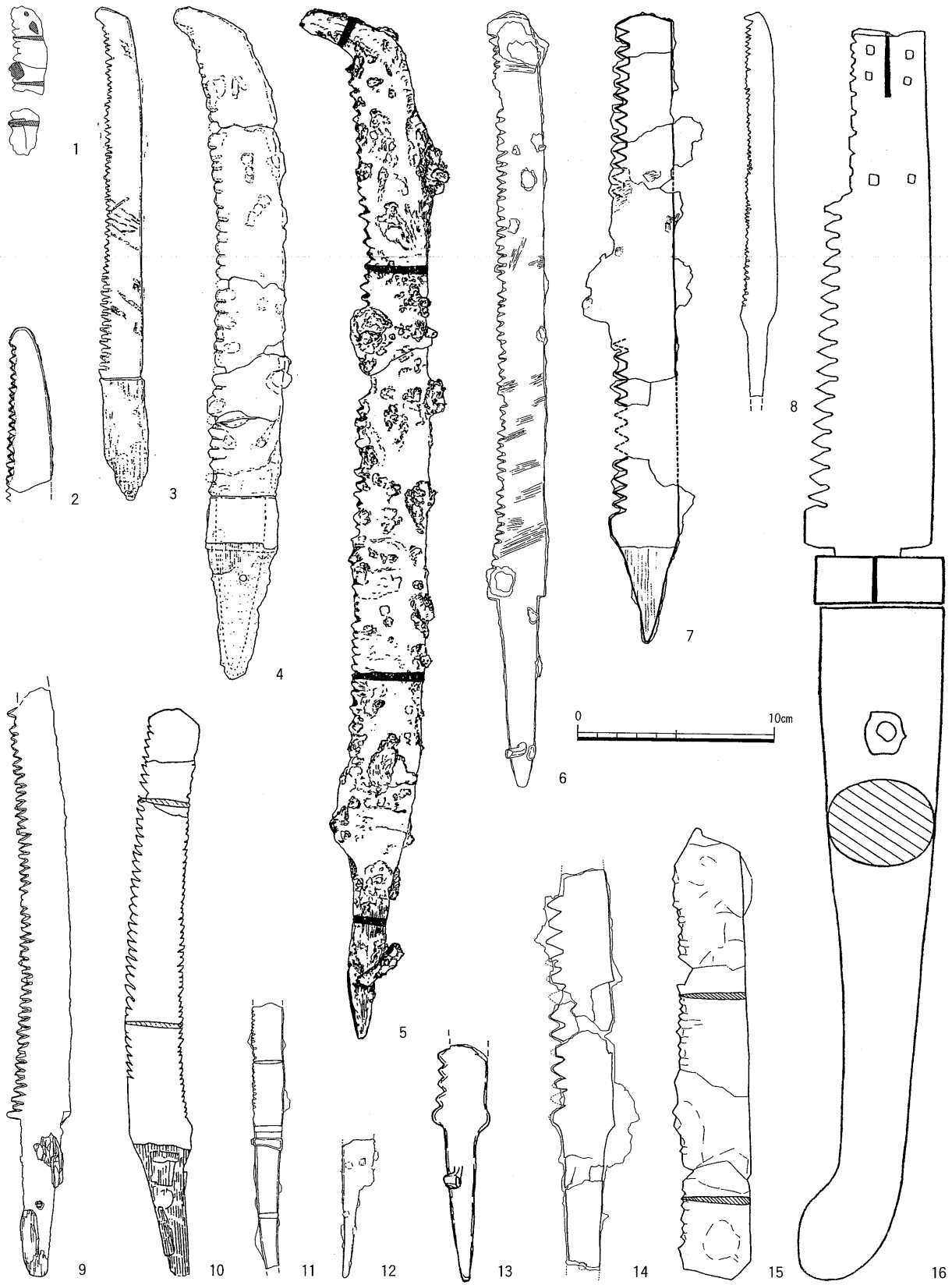
関を刃と背の両側に明瞭につくるものとして白倉下原遺跡・冷水村東遺跡・鎌田遺跡（13）・法隆寺伝世鋸（16）がある。なかでも法隆寺伝世鋸や白倉下原遺跡は、鋸元に親目（元歯）状の大きい歯をつくる。他の例は関が不明瞭で、元歯をつくらずに他の鋸歯に比べ歯を大きく突出させるものが多い。ただ、物井5号横穴墓（7）は鋸元には親目状の歯をつくるものの、関は不明瞭である。

鋸身の先端は、鴨入道1号横穴・長勝寺脇館跡・栗原遺跡が鍵の手状に斜めに折れて突出する。西山23号横穴墓も先端が鍵の手状に曲がる可能性が高い。このように先端が鍵の手状に突出するのは歯道が内湾することと関わりがあろう。

茎は身との中心に取り付くものと背に偏るものがある。前者は、鴨入道1号横穴・郷の坪第1号墳・白倉下原遺跡・物井5号横穴墓・冷水村東遺跡である。法隆寺伝世鋸を典型に見て取ることができるが、いずれも法隆寺伝世鋸に比べると茎幅は広い。後者は栗原遺跡や待戸遺跡（12）である。ともに茎幅が鋸身の半分ほどである。

##### （b）鋸歯

鋸歯の形は三角形、二等辺三角形、鼠歯がある。大半が素歯であるが、栓歯も数点認められる。アサリは不明瞭な点もあるが、大半が施される。ナゲシは、錆などの遺存状態により、有無の確認は困難である。歯の枚数でみると、3cm3枚は郷の坪第1号墳・法隆寺伝世鋸、3cm4枚は西山23号横穴墓・物井5号横穴墓・鎌田遺跡、3cm5枚は鴨入道1号横穴がある。そのほかは3cm6枚以上となり、長勝寺脇館跡にいたっては3cm9～10枚と細かい。これらの差異は、歯の目立て技術の習熟具合よる技術的な差異、もしくは時期差を示すことも考えられる。歯の枚数によって性能に差があるのは間違いなく、歯の大小による細疎が伐採及び製材の対象による機能差とも考えられ、今後の検討の余地を残す。



第3図 古代の出土鋸 (1:3)

1. 西山23号横穴墓 2. 東大竹遺跡 3. 長勝寺脇館跡 4. 鴨入道1号横穴 5. 栗原遺跡 6. 白倉下原遺跡 7. 物井5号横穴墓  
 8. 武蔵国府関連遺跡 9. 冷水村東遺跡 10. 羅州新村里9号墳 11. 白幡前遺跡 12. 待戸遺跡 13. 鎌田遺跡 14. 郷の坪第1号墳  
 15. 神宿5号横穴墓 16. 法隆寺伝世鋸

遺跡名	所在地	出土状況	柄形状	全長	鋸身長	鋸身幅	鋸身厚	茎長	鋸歯	アサリ	ナゲシ	時期
鎌田遺跡	茨城県	竪穴住居	片柄	12.2	4.2	3.1	0.2	8	三角形	×		9C前
白倉下原遺跡	群馬県	竪穴住居	片柄	39.1	27.1	3.4	0.17 ~0.42	9.5	三角形	○	○	8C前
冷水村東遺跡	群馬県	住居跡	片柄	29.8		3.4	0.3		素歯か	○		8C第3四半期
荒砥上川久保遺跡	群馬県	住居跡	片柄	13.1		1.7	2.7					9C前
愛宕山遺跡	群馬県	住居跡	弓張									8C後
栗原遺跡	東京都	竪穴住居	片柄	50	35	3				○		8C
武蔵国府関連遺跡	東京都	井戸跡	片柄	19.7	15.3			4.4				8C
西山23号横穴墓	千葉県	横穴	片柄	13.8	13.1	3.1	0.5		栓歯か	○	○	7C
長勝寺脇館跡	千葉県	住居跡	片柄	25.1		2.2			二等辺 三角形	○	○	8C
待戸遺跡	千葉県	集落内	片柄	5.1		1.9			栓歯	○	×	
白幡前遺跡	千葉県		片柄	13.4		1.5						
神宿5号横穴墓	千葉県	横穴	片柄	22.3		3.3	0.3 ~0.5		三角形	○	○	7C後~8C
東大竹遺跡	神奈川県	掘立柱建物	片柄	8.5		1.8~ 2.3	0.2		三角形		○	10C
石神遺跡	奈良県	溝	片柄	44.5	25.2	2.7~ 3.8	0.35 ~0.4		三角形	×	×	7C後
郷の坪第1号墳	島根県	横穴式石室	片柄	20		3.3			二等辺 三角形			7・8C
物井5号横穴墓	島根県	横穴	片柄	32	25	2.8 ~3.5	0.2	5	素歯・ 剣先	○	×	
鴨入道1号横穴	島根県	横穴	片柄	35	25.5	3.6	0.35	9.5	剣先	○	×	7C後
羅州新村里9号墳	韓国	甕棺	片柄	28.5		3			栓歯	○		5C後
法隆寺伝世鋸	奈良県	伝世品	片柄	64.8	26.6	5.38~ 6.56	4.2 ~4.8			○	×	7Cか

※寸法数字はcm単位を示す

表1 古代出土鋸一覧

### (c) 目釘

白倉下原遺跡や鎌田遺跡に目釘が残る。目釘自身は先端部が折れ曲がっている。その他は、茎に目釘孔のみが残る。目釘の位置は、茎の先端や茎中央付近と一定ではない。法隆寺伝世鋸は座金を設け、座金から突き出た目釘の先端をかしめている。ただ、出土鋸では座金を確認できないが、先の2例は端部が折れ曲がることから、端部をかしめている可能性が高い。

### (d) 口金

鴨入道1号横穴や白幡前遺跡、栗原遺跡で確認できる。鴨入道1号横穴や白幡前遺跡は、口金が茎に銹着していることから柄の中に嵌めこんでいる可能性が考えられる。栗原遺跡では茎に口金が銹着し、留輪金具も共伴して出土するなど、口金が装着されていたと考えられる。

以上のように出土鋸の検討を試みた。古代の出土鋸は栗原遺跡や長勝寺脇館跡など先端部が鍵の手状に曲がる形状をその時代の特徴的な型式と考えられる(伊藤1993)。しかし、白倉下原遺跡や物井5号横穴墓のように先端が屈曲しないものもあり、先端部が曲がるものが古代の鋸として一般的であるとはいえないだろう。

目釘については、目釘孔残るものが多く、大半は目釘を備えていたのだろう。口金については、口金が柄に装着されるため、有無については柄の遺存状態に左右される。柄の遺存例が少ない中では、装着が通有であったかは断定できない。

## V. 石神遺跡出土鋸の特徴

集成をもとに若干の検討を行った。本項ではIV章で述べた4つの属性、(a)鋸身の形状・(b)鋸歯・(c)目釘・(d)口金をふまえたうえで、石神遺跡出土鋸と比較してみたい。

(a) 鋸身の形状については、石神遺跡例は鋸身先端を欠損しているののでわかりにくい。石神遺跡例は、先端部に向けて鋸身の幅が細くなる点から内彎形状も考えられる。しかし前項で

述べたように鋸身が直線的な形状もありどちらともいえない。鋸身は本来もっと長いものと推測され、鋸身長は1尺3寸(40cm)くらいに復元される<sup>5)</sup>。

(b) 鋸歯については、石神遺跡例は歯が欠損し、不明である。三角形もしくは二等辺三角形と考えられる。アサリやナゲシについてもわからない。歯は3cm3枚と比較的大型といえる。歯の欠損が顕著であり、実用によるのか、歯の目立て技術に基因するのか、不明である。

(c) 目釘については、石神遺跡例は目釘を茎の先端に打ち込むが、端部を折り曲げてかきめない。かきめた目釘端部が折損した可能性もあるが、端部が柄からはみ出るとは考えにくい。目釘自身は柄に嵌め込まれたままであり、柄には座金の痕跡を見て取れないことから、装飾的な要素は薄いといえる。

(d) 口金については、石神遺跡例は口金が柄の中に嵌め込んでいる。前項で述べた2例もその可能性が高い。一方で、法隆寺伝世鋸は口金が柄の周囲に巡っている。このように口金の装着法に柄の中に嵌め込むものと柄の周囲に巡るものと2種類あることがわかる。この2種の違いは、製作技術に異なる系譜が存在するのか、または儀器と実用という性格の違いに起因するのかもしれない。石神遺跡例がどこまで実用として機能したか明確ではなく推測の域をでない。他の大工道具において口金がどのように装着しているかも検討してみる必要があるだろう。

以上のような特徴以外にも、石神遺跡例に固有なものとして、①柄の形状と②茎の形状を挙げることができる。

①については、以前に法隆寺伝世鋸と近似することを指摘したことがある(拙稿2007)。出土鋸において柄の形状を残すものが稀であるが、木柄のみが出土し、木製品として扱われるものがある。そのなかには、鋸の柄と推定されるものが平城京で出土している<sup>6)</sup>。この柄は柄尻をわずかに膨らせるものと細く削りだすものがある。ともに柄の小口面に幅広の茎の挿入痕が残る。工具柄であることはわかるが、鋸の柄と断定できる根拠は少ない。鋸以外の工具柄も推定されうる。仮に鋸としても、口金や目釘がなく、石神遺跡例の柄とは画するものであろう。石神遺跡例のような蕨手状の柄が特異であり、法隆寺伝世鋸で議論される儀器用という可能性も否定できない。これまでの出土の鋸身の検討から、古代の鋸は押し挽き可能であるが、現代に比べ使いづらいものであったとされ、実用か儀器用かを検討するのは容易ではない。今後、木製品として扱われている出土工具柄を収集・分析することで、工具柄の分類も可能かもしれない。

また、②については、茎が背側に偏り、背と茎が直線的である。今回集成した古代出土鋸でも栗原遺跡や待戸遺跡にも認められる特徴である。長勝寺脇館跡もその可能性がある。法隆寺伝世鋸のように、茎が鋸身の中央に取り付くものとは明瞭に異なる。一方で、韓国羅州新村里9号墳(10)は、両刃でありながら、茎が背に偏っている。石神遺跡例と時期も出土地も異なるため直接的に結びつけることはできないが、系譜などを考える上で参考となろう。このような茎の取り付け方の違いは、機能的な違いなのか、製作方法の違いであるのか、類例の増加を待って検討したい。

## VI. おわりに

本稿では古代の出土鋸の集成から石神遺跡出土鋸の位置付けをおこなった。石神遺跡例は古代の鋸と比べ、柄や茎の形状において特異な形状を見せることがわかった。鋸は、6世紀代に茎のつく形態があらわれるのを画期とし、7世紀以降の古代鋸はそれを踏襲しながら大型化し、

目釘や口金などを備えるなど完成された機能を持ち合わせているとされる（伊藤1993）。このような古代鋸の位置付けにありながらも、今回の検討で示したように部分的には差異が認められる。これらの差異は時期差や切断対象の違いによる機能差なのかどうかかわからない。今後の類例の増加を待って、検討したい。

石神遺跡例のように柄が完存する例は、古代の鋸として法隆寺伝世鋸に次いで2例目となり、茎式の鋸身と柄の着装法を考えるうえで良例といえるだろう。一方で、韓国においては、羅州新村里9号墳のように5世紀代にすでに茎式鋸が出現し、日本に影響を及ぼす可能性が指摘されている。しかし、既に伊藤氏が指摘しているように、栓歯である新村里9号墳は押し挽きと考えられ、日本の鋸が素歯を呈し、押しでも引いてもきれる自在鋸であることから、直接的な系譜は追えず、日本の鋸は独自の発展をとげている（伊藤1993）。鋸の挽き方の違いは柄自体にも違いをみせることも考えられる。柄によって性格や系譜の違いを見せるのかどうか、今後の検討が必要である。

鋸の変遷史において、中世になると木の葉型鋸が出現することが知られる。古代鋸から中世の木の葉型鋸への変化は大きな画期と考えられるが、どうしてこのような変化が起こったのかわかっていない。形式的な変化なのか、建築技術や伐採対象の変化による機能的な変化なのか。そして、木の葉型鋸の出現を考える上で古代の鋸を検討することは重要なのである。

古代宮殿や寺院が立ち並んでいた飛鳥にあって、石神遺跡から鋸が出土したことは古代建築技術を考える上で意義深いといえよう。近年は低湿地遺跡の発掘も進み、遺跡から木製の部材が出土する事例も増えている。部材に残る加工痕を観察することによって、当時の木工技術を読み取ることが可能である。今後は、出土する出土木製品と部材加工痕を分析することによって、考古学からみた大工道具史と古代建築技術の解明が期待できるだろう。

小稿を執筆するにあたり次の諸氏から有益なご助言を賜った。ご尽力を賜った各氏に感謝の意を表します。（五十音順、敬称略）

相原嘉之、西光慎治、高橋幸治、竹中大工道具館、次山淳、豊島直博、箱崎和久、松村恵司、渡邊晶

### 【追記】

平成21年1月26日、明日香村教育委員会文化財課に長年勤められていた西川貴三子さんが亡くなりました。私が嘱託として平成19年から明日香村に勤務してからのお付き合いでした。私が現場から帰ってくるといつも暖かい笑顔で迎えてくれました。一年目だった私はその笑顔にずいぶん励まされました。誰にでも優しくした西川さん。ご冥福をお祈り致します。合掌。

### 註

- 1) 鉄身に残る木質から柄を杵付鋸、弓形鋸、鞘鋸などの類型を推定されている（吉川1976・上田1957・伊藤1993）。
- 2) 鋸身の先端に残る六つの孔とその歯の刻まれていない部分を元に議論が分かれる。本来はもっと長い鋸身の両端に大きく彎曲した木の杵がついた杵ノコ型を再利用したもの（村松1973）と、6つの孔を鋳留めで修理したもの（中村1967）、大材を挽くのに使用されたが、性能悪く改造を加えたが折れてしまい最終的に角孔を空けて鋸以外で使用した（吉川1976）と諸説分かれる。



- 3) 今回は7世紀後半から10世紀前半に絞っているため、伊藤1993による集成における土合1号墳・北山第2号墳・朝町百田B-2号墳・寺所遺跡24号住居址は除外している。正倉院例も刀子鋸であり比較から除外している。よって上記5例を除外した6例に今回新たに11例を追加した17件としている。荒砥上川久保遺跡については財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1998を参照した。また、今回の一覧表と集成図には、参考として韓国出土の新村里9号墳と法隆寺伝世鋸も載せている。
- 4) 6世紀代において、福岡県宗像地域の中小円墳に鋸が集中して出土することと付近での生産遺跡の存在から、地域の人々による新式の鋸の導入が推測されている(伊藤1993)。今回検討した古代の鋸においても、分布に鳥根県や群馬県、千葉県に偏って集中するようにみえる。特定の地域で使用されたのは周辺環境や集団の性格によるかもしれない。分布の偏りについては、出土点数も少ないため傾向を述べるにとどめておきたい。
- 5) 渡邊晶氏のご教示による。
- 6) 奈良国立文化財研究所1985 『木器集成図録』近畿古代篇。平城京と平城宮内から出土している。ともに茎を焼き込みで挿入した痕跡が残っている。

### 参考文献

- 赤沼かおり・福井幸子1997 「日本近世以前における鋸の使用法」『竹中大工道具館研究紀要』第9号 財団法人竹中大工道具館
- 穴沢味光・馬目順一1973 「羅州潘南面古墳群―「梅原考古資料」による谷井濟一氏発掘遺物の研究―」『古代学研究』70 古代学研究会
- 有光教一1967 「周辺諸国の産業技術と日本との関係 朝鮮三国時代の農具と工具」『日本の考古学』 歴史時代上 河出書房
- 伊勢原市教育委員会1990 『東大竹遺跡群Ⅰ』
- 伊藤 実1993 「日本古代の鋸」『考古論集―潮見浩先生退官記念論文集―』潮見浩先生退官記念事業会
- 印旛郡市文化財センター1990 『長勝寺脇館跡』
- 内田律雄・柚原恒平・榊原信也1992 「海士町・鴨入道一号横穴出土の鋸と鑿について」『季刊文化財』 第72号 鳥根県文化財愛護協会
- 上田 舒1957 「東亜における鋸の系譜」『考古学雑誌』第42巻3号 日本考古学会
- 嘉来國夫1986 「法隆寺献納宝物の鋸」『全建ジャーナル』1号 全国建設業協会
- 神宿横穴墓群発掘調査団1978 『神宿横穴墓群発掘調査報告書』
- 金延鶴1972 『韓国の考古学』河出書房新社
- 国立文化財研究所2001 『羅州新村里9号墳』
- 財団法人市原市文化財センター1994 『市原市待戸遺跡・待戸供養塚』
- 財団法人茨城県教育財団2001 『鎌田遺跡』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1997 『白倉下原・天引向原遺跡V―甘楽パーキングエリア地内遺跡の調査―奈良～江戸時代本文編』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1998 『冷水村東遺跡・西国分新田遺跡・金古北十三町遺跡』
- 鳥根県・隠岐島前教育委員会1995 『物井横穴墓群』
- 住宅・都市整備公団 首都圏都市開発本部・財団法人 千葉県文化財センター1991 『八千代市白幡前遺跡』
- 竹島卓一1961 「法隆寺の工具」『世界美術全集 第2巻・日本(2) 飛鳥白鳳』角川書店
- 永嶋正春・濱島正士1993 「〈コラム4〉出土した鋸―そのかたちと機能―」『科学の目で見える文化財』 アグネ技術センター
- 中村雄三1967 『図説 日本木工具史』新生社
- 名古屋大学文学部考古学研究室1990 『考古資料ソフテックス写真集』第5集
- 奈良文化財研究所2001 「石神遺跡の調査―第110次」『奈良文化財研究所紀要2001』

- 奈良文化財研究所2002 「石神遺跡の調査―第116次」『奈良文化財研究所紀要2002』
- 奈良文化財研究所2007 「石神遺跡（第18・19次）の調査―第140・145次」『奈良文化財研究所紀要2007』
- 奈良文化財研究所2008 「石神遺跡（第19・20次）の調査―第145・150次」『奈良文化財研究所紀要2008』
- 西山横穴群発掘調査団1977 『富津市西山横穴群調査報告書』
- 平澤一雄1980 『産業文化史 鋸』クオリ
- 府中市教育委員会・府中市遺跡調査会2003 『武蔵国府の調査24』
- 長谷川 透2007 「石神遺跡と法隆寺の鋸」『奈良文化財研究所紀要2007』奈良文化財研究所
- 平尾良光1991 「東京国立博物館法隆寺献納宝物鉄製鎌および鋸の蛍光X線分析法による化学組成の調査」『MUSEUM』485  
東京国立博物館
- 古瀬清秀1991 「農工具」『古墳時代の研究』8古墳Ⅱ 副葬品 雄山閣
- 星野欣也1991 「法隆寺献納宝物の鋸と鎌―機能面からの一考察―」『MUSEUM』485 東京国立博物館
- 星野欣也・沖本弘・渡邊晶・土屋安見・石村具美1992 「法隆寺献納宝物の鋸と鎌」『竹中大工道具館研究紀要』第4号 財団  
法人竹中大工道具館
- 三木文雄1954 「古墳出土の鋸に就いて」『考古学雑誌』第40巻第1号
- 三木文雄1957 「鋸について」『那須八幡塚』吉川弘文館
- 三木文雄1959 「鋸と鎌」『MUSEUM』95号 東京国立博物館
- 村松貞次郎1973 『大工道具の歴史』岩波書店
- 吉川金次1976 『鋸』ものと人間の文化史18 法政大学出版局
- 立教大学文学部史学研究室1957 『栗原』
- 渡邊 晶1999 「古代・中世における建築用主要道具について―木の建築をつくる技術と道具の歴史に関する調査報告 その  
1―」『竹中大工道具館研究紀要』第11号 財団法人竹中大工道具館

#### 挿図出典

第1図：星野1991・平澤1980を一部改変、再構成。再トレース

第2図：奈良文化財研究所紀要2007より転載

第3図：1. [西山横穴群発掘調査団1977] 2. [伊勢原市教育委員会1990] 3. [印旛郡市文化財センター1990] 4. [内  
田・柚原・榊原1992] 5. [立教大1957] 6. [群馬県埋蔵文化財調査事業団1997] 7. [隠岐島前教育委員会1995] 8.  
[府中市教育委員会・府中市遺跡調査会2003] 9. [群馬県埋蔵文化財調査事業団1998] 10. [有光1967] 11. [千葉県文  
化財センター1991] 12. [市原市文化財センター1994] 13. [茨城県教育財団2001] 14. [名古屋大学文学部考古学研究室  
1990] 15. [神宿横穴墓群発掘調査団1978] 16. [三木1957] の各報告書より転載